様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22　年 4　月 30　日現在

研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2006～ 2009
課題番号：18401011
研究課題名（和文）　北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究

研究課題名（英文）　Reality study of the temple festivals and Xianghui entertainment troupes in the Huabei area , focusing on Beijing and Tianjin

研究代表者
櫻井　龍彦　(SAKURAI TATSUHIKO)
名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授
研究者番号：60170643

研究成果の概要（和文）：
北京と天津を中心とした華北における廟会及びそこに参拝する民間の祭祀・芸能集団の組織としての実態を調査し、その現代的意義を明らかにすると同時に組織の活動基盤にある碧霞元君と媽祖への女神信仰の諸相を調べ、組織活動のなかでの信仰の位置づけを解明するために調査研究をすすめた。毎年、北京では妙峰山と丫髻山の定期廟会および旧正月の廟会と各組織の活動、天津では天后宮の「皇会」組織活動を現地調査した。主な成果は 3 冊の報告書として出版した。

研究成果の概要（英文）：
Over the past four years I investigated the current state of the temple festivals in the Huabei area, focusing on Beijing and Tianjin, and clarified the actual condition of Xianghui as the organization overseeing the performers. Specifically, some aspects of the belief systems of Bixiayuanjun and Mazu, which form the basis of the organization, were investigated, and the role of these beliefs within the organization's activities were brought to light.Every year I conducted a participant observation in Beijing of the regular festivals of Mt. Miaofeng and Mt.Yaji and investigated the activities of each of the the entertainment troupes, and in Tianjin I surveyed the organizational activities of Huanghui at the Tianhou Palace. The main study results were published in three reports.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1, 600, 000	480, 000	2, 080, 000
2007 年度	1, 600, 000	480, 000	2, 080, 000
2008 年度	1, 100, 000	330, 000	1, 430, 000
2009 年度	1, 500, 000	450, 000	1, 950, 000
総　計	5, 800. 000	1, 740, 000	7, 540, 000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：中国哲学
キーワード：宗教学、中国哲学、文化人類学、民俗学、民間信仰、廟会、道教、仏教

１．研究開始当初の背景

かつて廟会は「四旧」とみなされ、その宗教祭祀にかかわる伝統は途絶えた。それが復活したのは改革開放以降すなわち 1980 年代後半に入ってからである。しかし本格的な復興は 90 年代後半まで待たなければならなかった。

北京での代表的な廟会は郊外の妙峰山と丫髻山の廟会である。いずれも碧霞元君を祀り、廟会は元君を信奉する「香会」という民間の信仰組織を基盤にしている。

天津の廟会では南方から伝来した媽祖を祀り、天后を信奉する「皇会」という民間祭祀組織が支えている。

香会（皇会）は「民」の自発的な祭祀組織であるため、為政者はそれが迷信活動に発展することを警戒する。そこで組織の復活は、今日では「官」の支持と認可が必要となる。研究当初の関心は、官民のパワーバランスのなかで揺曳する民間信仰の変質および香会が存続のためにその活動を「民俗」として位置づけ、無形文化財保護の指定対象にしようという動きに関心があった。

後者は官が「民俗」を観光資源として再編しようとする動きに呼応しているが、このような傾向が信仰組織のあり方をどのように変容させていくかを調査したいと考えた。

すなわち民間信仰を支える社会的基盤とその実践活動の解明をとおして、信仰の特徴的性格や現代中国において民間信仰が「官」と「民」のせめぎあいの中で、どのように生き残っているか、活かされているか、などを調べることで地域社会に根づく民間信仰の内実や動向を知ることができると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は天津・北京を中心に華北地域における復活した廟会および祭祀芸能組織である「香会」の実態と碧霞元君、媽祖、土着神、観音菩薩などの民間諸仏神の混淆性がもつ現代的意義を明らかにすることにある。

すなわち北京においては碧霞元君信仰とその祭祀活動、天津においては天后（媽祖）信仰とその祭祀活動に関する現地調査をとおして、現代中国における民間信仰の諸相を探求することにある。

廟会の復興と「民」の宗教祭祀活動には、「官」が実質的に介入しながら地域内の結合と社会秩序の安定を画策していることがうかがえる。そこで香会の実態調査を徹底的におこなうことで、祭祀と芸能に従事する人々の心性、民間信仰のシンクレティックな内実、「社区」（コミュニティ）の伝統文化保存と居住民の宗教アイデンティティを現地調査によって究明することが必要である。

廟会に参加する祭祀芸能集団の実態調査は先行研究がない。したがって本研究の第一の使命であり最大の貢献として、組織の会員と面談し、聞き取り調査により得た情報を集大成した厚い民俗誌の作成を心がけた。

３．研究の方法

調査研究の対象は以下の３つである。

(1)妙峰山、丫髻山の廟会における信仰組織「香会」の実態調査。
(2)旧北京城内で旧正月に復活した寺廟の現地調査。
(3)天津皇会における信仰組織「香会」の実態調査。

調査研究方法としては、以下の4点を中心とした。
(1) 年間を通じた廟会の調査。
(2) 廟内の石碑を悉皆調査し、碑文の解読を通して祭祀組織の歴史と構成を探る。
(3) 祭祀組織の構成員に対する個別訪問による聞き取り調査。
(4) 北京、天津周辺の華北農山村部の廟会調査。

4．研究成果

北京・天津を中心に華北地域に広く分布する碧霞元君と媽祖の二大女神への信仰を対象とし、「民」の信仰の混淆性、多様性、重層性を捉えるとともに、組織としては「官」から〈登録化〉と〈整序化〉の両方向で規制されていることを明らかにした。

〈登録化〉とは、民間信仰の特徴である〈欲望の充足〉という側面が迷信や呪術的行為として現れやすく、それが廟会で表面化することを忌避するため「官」が登録という制度によって抑制することである。

〈整序化〉とは、廟が(1)パンテオンとして組織化されていること、(2)「社区」(コミュニティ)の一体化として機能していることである。複数の神々の混淆や融合を特徴とする民間信仰のシンクレティックなあり方が、廟会の場では一定の方向への統合ではなく、組み合わせのバリエーションをもつ〈整序化〉として「官」によって組み込まれている様相を概念化したものである。

信仰の内実としては、二大女神の重層する側面、土着神が融合する側面、華北に特徴的な動物神を中心とした「四大門」信仰がまだ生きていることも明らかにした。

また祭祀組織「香会」は民間芸能集団でもあるので、「社区」での役割、構成員の芸能に対する日常的な取り組み、宗教アイデンティティなども調べた。

その結果、北京と天津を中心とした華北の多様な廟会を総合的に考えるためには、両地区にまたがる参拝者の信仰圏、道教の娘娘神を仏教の観音菩薩と土着民俗宗教の王奶奶神を媒介にした習合的な女神信仰として考察する視点が重要であること、組織の芸能的側面は、近年では伝統文化遺産として保護、伝承の対象となっているため、その視点からの考察も必要であるという認識にいたった。

(1)調査した組織の数

4年間で北京が延べ数で67ヶ所、天津が50ヶ所以上に及ぶ。

そのうち整理が完了し報告書に収録できた香会の数は北京が40ヶ所、天津が40ヶ所である。また報告書には共同研究をしてくれた調査協力者の論考など合計29本も収録できた。

(2)学会発表と招待講演

合計4回におよぶ。内容は廟会と民間信仰、文化財保護の問題に関するものである。

(3)論文

国内外の学術雑誌に6本投稿し、掲載された。

(4)報告書

毎年度末にその年度の調査研究結果とし1冊ずつ刊行した。合計3冊になる。訪談記録はインタビューを忠実に文字おこししたもので、今後の研究に活用できる一次資料として貴重である。

廟会に参加する祭祀芸能集団の研究は本格的にはまだ誰も実施したことがないので、先駆的な研究となった。ここ数年、中国側の関連論文に引用されることがあり、高い評価をえている。

今後の課題としては、近年、祭祀芸能集団がとくに芸能の部分が特化して無形文化遺産として登録される傾向がみられるので、中国の宗教政策と文化保護政策とを関連づける視点で考察することが必要になってくると思われる。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 櫻井龍彦「応如何思考民間信仰与文化遺産的関係」（中国語論文）『文化遺産』2010 年第 2 期（掲載決定）査読有

② 櫻井龍彦「応如何思考民間信仰与文化遺産的関係」（中国語論文）『第七届民間文化青年論壇：“民間信仰与文化遺産”国際学術研討会会議論文集下冊』2009、pp626-636　査読無

③ 櫻井龍彦「仏教と道教のシンクレティズム－碧霞元君、媽祖、観音の習合について」櫻井龍彦・尚潔・王利文編著『天津皇会与民間祭祀・芸能組織的調査記録』、2009、pp258-269　査読無

④ 櫻井龍彦「丫髻山における碧霞元君信仰－廟宇と石碑の現状」『名古屋大学中国語学文学論集』20、2008、pp29－62　査読有

⑤ 櫻井龍彦「妙峰山における「香会」の復活と現代的意義」『中国学の十字路—加地伸行博士古稀記念論集』、2006、pp524-538　査読無

⑥ 櫻井龍彦「日本的媽祖信仰-其分布及現状」（中国語論文）『中華媽祖文化学術論壇論文集』、2006、pp28-33　査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 櫻井龍彦「応如何思考民間信仰与文化遺産的関係」（中国語）、「“民間信仰与文化遺産”国際学術研討会」、2009 年 8 月 7 日、珠海（中国）

② 櫻井龍彦「日本的媽祖信仰－其分布及現状」（中国語）、「天津媽祖文化学術論壇」2006 年 9 月 21 日、天津（中国）

③ 櫻井龍彦「妙峰山廟会に集う人びと－復活した民間の信仰組織「香会」について」、平成 18 年度「老舎研究会」2006 年 9 月 1 日、大阪

〔図書〕（計 3 件）

① 櫻井龍彦・尚潔・王利文・孫慶忠編著、「名古屋大学国際開発研究科、『北京・天津廟会与民間祭祀組織（香会）的田野調査研究』（中国語）、2010、総 667 頁。

② 櫻井龍彦・尚潔・王利文編著、名古屋大学国際開発研究科、『天津皇会与民間祭祀・芸能組織的調査記録』（中国語）、2009、総 287 頁。

③ 櫻井龍彦・孫慶忠編著、名古屋大学国際開発研究科、『妙峰山的記憶与記録』（中国語）、2008、総 443 頁。

6．研究組織

(1)研究代表者

櫻井　龍彦　（SAKURAI TATSUHIKO）
名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授
研究者番号：60170643